

錦織南遺跡

1993. 3

錦織南遺跡調査会

錦織南遺跡

1993. 3

錦織南遺跡調査会

はじめに

目 次

これまで、錦織町遺跡において発掘調査などが行われた結果、縄文時代・奈良時代・中世の遺構が検出されています。また、包含層からは弥生時代から中世に至る遺物が出土しています。

今回の調査地は、西方の羽曳野丘陵から流れる細谷川に北接した場所で、1981年に大阪府教育委員会によって実施された縄文時代晩期の河道が検出された調査地の東にはほぼ隣接しています。調査の結果、細谷川の変遷をしるてかかりをえることができました。

最後になりましたが、発掘調査にご協力頂きました方々に厚く感謝の意を表します。

錦織町遺跡調査会
理事長 西尾典次

は じ め に

I 調査に至る経過 1

II 調査の成果 4

1. 上層の遺構 4

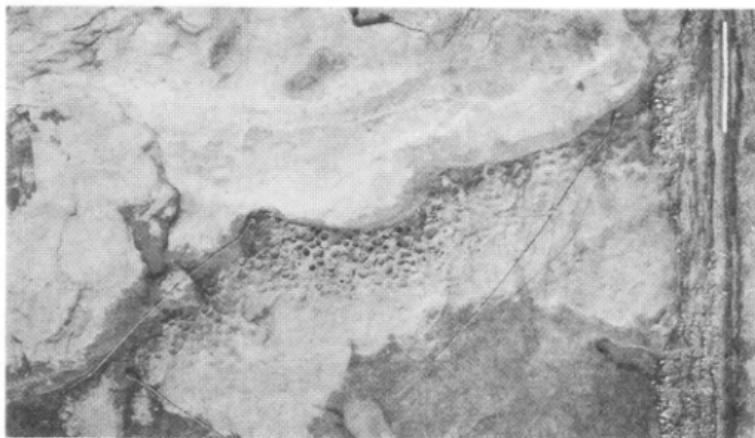
2. 下層の遺構 5

III 出土遺物 6

1. 土 器 6

2. 石 器 15

IV ま と め 29



大阪層群上面に残された哺乳動物の足跡化石

I 調査に至る経過

富田林市は大阪府の南東部に位置し、南北約10km、東西約6.5 kmの距離を有し、39.66 km²の市域面積をもっている。市域のほぼ中央には石川が北に流れている。この石川によって形成された低位及び中位の河岸段丘が河岸に発達しており、特に、左岸に集落遺跡が顕著に見られる。

富田林市内の遺跡の立地を見ると、集落が広がる段丘面を見下ろす丘陵の先端部に前期及び後期の古墳が点在している。中期の古墳は、中位段丘面に立地しており、他の時期の古墳に比べ極めてその数は少ない。集落遺跡は、旧石器時代から近世に至る時期のものがあり、原始の時代から富田林の地に人々が生活していたことがわかる。

錦織南遺跡は、市内の南部にあって、石川の左岸、近鉄南大阪線滝谷不動駅の南西に広がっている。その規模は、南北630m、東西470mにおよぶ。1971~1976年に富田林市教育委員会が実施した分布調査によって確認された遺跡である。その後、富田林市教育委員会や大阪府教育委員会が実施した発掘調査で、遺跡の内容がだいに明らかになり、縄文時代晩期から中世に至る複合遺跡であることが併明してきている。



挿図1 発掘調査地位置図

この錦織南遺跡において、大阪府南部流域下水道事務所が大和川南部流域下水道事業として河内長野幹線錦郡中継ポンプ場の築造工事を計画し、平成3年度中に工事着手をしたい旨の打診が、富田林市下水道部工務課を通じて富田林市教育委員会にあった。本事業は、富田林市公共下水道事業との関連が強いことから、富田林市において発掘調査の対応を行う運びとなった。これを受け、富田林市教育委員会は大阪府教育委員会と協議をした結果、事前に予定地内の遺跡の状況を具体的に把握するため、平成3年1月に大阪府教育委員会によって事前の小規模確認調査を行うことになった。その結果、古墳時代の遺物を含む流路と河川堆積層が検出された。これをもとに事業主体である大阪府南部流域下水道事務所と工事の工法変更等による遺跡の保存計画について協議した結果、変更については困難であるとの結論に達し、平成3年度にポンプ場本体の部分を全面発掘調査することになった。

このような経過から、富田林市教育委員会教育長と大阪府南部流域下水道事務所長との間で、大和川南部流域下水道事業河内長野幹線錦郡中継ポンプ場築造工事の伴う埋蔵文化財包蔵地の調査について覚書を平成3年7月12日に締結した。これにより、調査に向けての検討を行った結果、富田林市教育委員会が錦織南遺跡調査会を設立し、平成6年度の供用開始に向けて発掘調査を進めていくことに至った。

現地調査は、平成3年10月1日から平成4年3月17日まで行い、報告書作成に伴う整理業務については、平成4年7月1日から平成5年3月31日まで行った。

錦織南遺跡調査会組織図

理 事 長 西尾 典次（富田林市教育委員会教育長）
事 務 局 長 花岡 主祐（富田林市教育委員会教育部長）
事務局次長 山口 幹男（富田林市教育委員会社会教育課長）
総 務 部 長 花岡 潤一（富田林市教育委員会社会教育課長補佐）
調 査 部 長 京谷 守（富田林市教育委員会社会教育課主幹兼係長）
技 師 中辻 亘（富田林市教育委員会社会教育課事務吏員）
理 事 北野 耕平（神戸商船大学教授・富田林市文化財調査会委員）
理 事 亀岡 勝敏（大阪府教育委員会文化財保護課長）
理 事 北野喜久男（富田林市教育委員会管理部長）
理 事 花岡 義弘（富田林市市長公室長）
理 事 松浦 隆次（富田林市総務部長）
理 事 坂本 龍男（富田林市下水道部長）



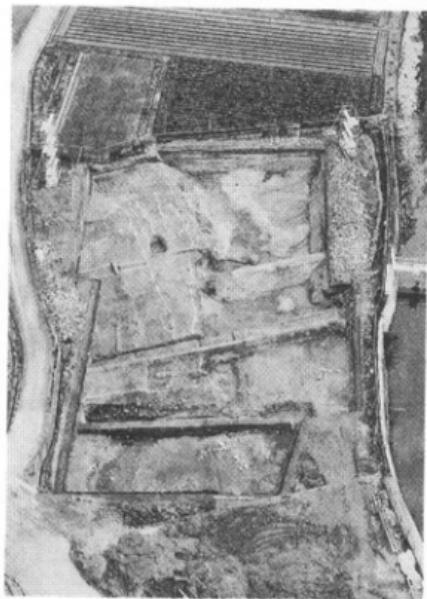
挿図2 調査地周辺遺跡分布図

II 調査の成果

ポンプ場建物建設予定地を対象とし、1774m²を全面発掘調査した。その結果、水田に伴う水抜き用の暗渠を2条を検出したほか、溝と4本の自然河道を検出した。発掘調査の過程で、上層の遺構面と下層の遺構面の2面においてそれぞれの遺構を検出した。

1. 上層の遺構

上層での遺構を検出した面までの基本的な堆積層は、9層ある。このうち、第1層および2層は、近・現代の水田堆積で、15~20cmの厚さである。第3層および4層は、約20cmの厚さがあり、旧水田の堆積で近世の遺物を含んでいる。この水田には、水抜き用の石詰暗渠が敷設されていた。第5層および6層は、約25cmの厚さで堆積しており、場面の水田面と同様に石詰暗渠が敷設されていた。この暗渠からは、16~17世紀代の遺物が出土している。さらに下には第7~9層が調査地の南東部にのみ約45cmの厚さで堆積している。この堆積も旧水田のものと思われ、12~16世紀代の遺物が出土している。この下の面を上層の遺構面としてとらえた。



上層遺構全景（西から）

溝

調査地の北東部に見られる。東西および南北方向の溝（溝1）には、瓦器が含まれている。北東端部に見られる北西から南東方向に流れる溝（溝2）は、河道2に流れ込む。

河道4

調査地の南に接する細谷川がこれに相当すると思われる。調査地の南端部で第3層上面を切り込んで堆積している。氾濫によるものである。

河道3

第5層上面から切り込んでおり、調査地の南半部を東に流れる。堆積には近世の遺物と共に人頭大以上の礫が荒い砂層に多数混入しており、流れの凄さを物語っている。河道2および1の堆積までも押し流してお

り、河道の底では大阪層群の表面が見られる。

河道2

第6層、一部第9層を除去した面で検出した。埋土中からは、弥生時代から鎌倉時代までの遺物が出土している。下層上面には、古墳時代の遺物に混じって植物遺体が多く含まれており、流れが次第に緩やかになっていったことが分かる。流れは、調査地の北西端から中央部を北の肩にして東方向に見られる。この河道を河道3か調査地の南西端から流れ込み、東半部に行くにしたがって、完全に河道2の堆積を切り込んでいる。

2. 下層の遺構

河道1

河道2のベースとなっている堆積が河道1の堆積である。青灰色シルトを中心とする埋土からは、縄文時代晩期に属する土器類が出土している。



河道1 全景航空写真（西から）



河道1 全景航空写真（東から）

III 出土遺物

今回の調査では、縄文時代から近世に至る遺物が出土した。1. 土器・2. 石器の順に観察を加える。

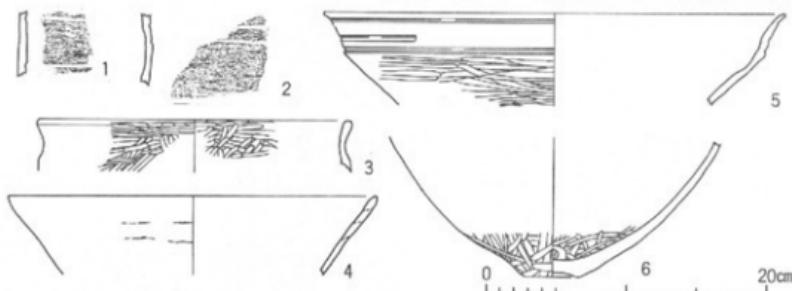
1. 土器

土器類には、縄文土器から磁器に至までさまざまな遺物が出土している。その大半が河道出土の遺物である。河道は、縄文時代晚期の土器だけが出土した河道1、縄文時代後期から中世に至る遺物を含む河道2、縄文時代後期から中世の遺物を含む河道3、包含層（第5・6層）切り込んだ古墳時代から近世の遺物を含む河道4がある。その他には、河道2に流れ込んでいた溝1・2や第6層を掘り込んだ暗渠1・第7層を掘り込んだ暗渠2がある。以下、河道・溝・暗渠・包含層の順に観察を加える。

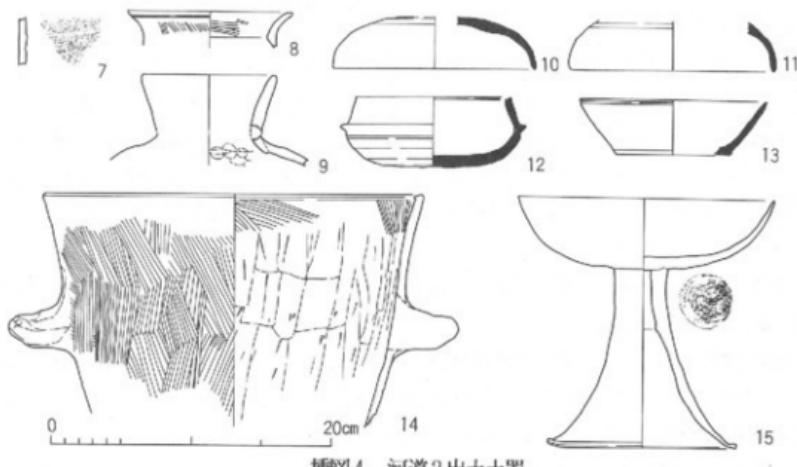
河道1（挿図3-1～6 図版6）

縄文時代晚期の土器が出土している。

縄文土器は、23点ある。そのうち1点は黒色研磨の精製土器で、他は粗製の土器である。黒色研磨の精製土器（3）は、鉢の口縁部のみ残存し、口径22.1cmを測る。粗製の土器には、深鉢・深躰あるいは甕の口縁部と思われるものと底部がある。深鉢（5）は、口径32.9cmを測り、体部の段は明瞭に残り、口縁部は外反する。外面は条痕調整が施され、口縁部外面には、貝殻による条線が3条巡る。深鉢あるいは甕の口縁部と思われるものは2点あるが、磨滅と剥離が著しく残りが悪い。（4）は、口径26.1cmを測り、外面に粘土紐の継ぎ目が残る。底部は、2点あり、ともに凹底のものである。胎土中に角閃石を含むものと含まないもの（6）がある。



挿図3 河道1出土土器



挿図4 河道2出土土器

(6)は、底径3.8cmを測り、外面は丁寧な条痕調整が内面はナデ調整が施されている。その他、条痕調整の後条線の施されるもの(1・2)や外面を繊維束によるケズリ調整を施したものがある。

河道2(挿図4-7~15・5-16~47 図版6・7)

上層からは縄文時代後期から中世の遺物(挿図5)が、上層からは縄文時代晚期から奈良時代に至る遺物(挿図4)が出土している。

下層の遺物には、縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器がある。

縄文土器は、12点あるかいいずれも粗製土器の細片である。土器片には外面を条痕によって調整するものと繊維束によってケズリ調整するもの(7)がある。

弥生土器は、弥生時代後期の平行タタキ調整(3本/cm)のある破片がある。

土師器は、古墳時代から奈良時代に至るものがある。古墳時代に属するものには、壺・高杯・瓶・甕などがある。壺(9)は、口径9.2cmを測り、口縁部は直線的に外上方にのびるタイプのものである。体部外面には煤かべつとりと付着している。高杯には、脚部と杯部を貼り付けによって接合するタイプと脚部を杯部に挿入して接合するタイプがある。貼り付けによって接合するタイプには、古墳時代後期の須恵器を模した(15)がある。杯部と脚部の接合部分には同心円の刻みが施されている。甕は、1点のみ出土している。(14)の形状は、バケツ状のを呈し、口縁端部は内傾する面をもち、体部中位に牛角状の把手をもつ。甕には、小型のもの

(8)と大型のものがある。奈良時代に属するものには、生駒西麓産の胎土をもつ土釜や螺旋暗文が残る皿がある。

須恵器は、古墳時代から奈良時代のものがある。古墳時代に属するものには(10~12)の蓋杯がある。杯身は、たちあがりが高く、器高の約1/2を占める。たちあがりは、貼り付け手法で形成されている。また、口縁端部は、内傾する凹面もつ。底部から杯部の外面は全体の2/3以上におよぶ回転ヘラケズリ調整が施されている。杯蓋(10・11)は、天井部と口縁部の境に稜が認められず、(12)より新しい時期のものである。奈良時代に属すると思われるものには、(13)の杯や高台の付く杯がある。

上層の遺物には、縄文土器・土師器・須恵器・黒色土器・瓦器・瓦質土器・灰釉陶器・須恵質土器・磁器・製塩土器・瓦がある。

縄文土器は、13点ある。その内縄文時代後期に属するものが2点ある。いずれも深鉢(16・17)である。(17)は、北白川上層式の口縁部片で外面に同心円文が施されている。(16)は、粗製の深鉢の体部片である。体部外面は、角度調整されている。

土師器は、古墳時代から中世に至るものがある。古墳時代に属するものには、高杯・甕がある。高杯は、(18)などほとんどが脚部片である。(18)は、据径9.6cmを測り、杯との接合部には不規則な刻みが施されている。奈良時代のものには、杯・皿・高杯・甕などがある。杯には、内面にヨコナデ調整の後斜放射状暗文の施されるものとヨコナデ調整もの(20)がある。皿は、平らな底部から斜め上に開く口縁部、端部は、わずかに肥厚するタイプ(24・25)のものである。いずれも底部外面をヘラケズリ調整し、内面には斜放射状暗文と螺旋暗文が施されている。高杯は、脚柱部を面取りするタイプ(19)のものである。甕は、口縁部が大きく外反し、体部外面をハケメ調整するタイプ(22)と体部はあまり張らず口縁部が大きくひらき、体部外面に調整を行わずオサエが残るタイプ(23)がある。(22)のタイプが大半を占める。中世のものには、小皿(40~43)や鬱蒼がある。小皿には、口縁部と底部の境に稜をもつもの(40~42)と底部から丸みをもって口縁部に至る(43)がある。

須恵器は、古墳時代から奈良時代に至るものがある。古墳時代に属するものには、蓋杯・長頸壺・短頸壺・甕・提瓶・甕などがある。蓋は、形骸化した稜を残し天井部内面に同心円タタキをナデ消した痕が観察できる(29)タイプと器形が小型化し、内面にかえりの付く(30)タイプがある。杯身は、たちあがりが短く内傾し、口縁端部が丸くおさまるもの(33・34)と内傾する面をもつものがある。長頸壺(28)は、1点のみ出土している。短頸壺は、口径が5cm以下の(27)と10cmを越える大型のものがある。奈良時代に属するものには、蓋杯・瓶・甕がある。蓋杯は、偏平な擬宝珠状のつまみをもつ蓋(31・32)と、高台をもつ杯身(35・36)がある。瓶は、(26)1点である。(26)は小型の瓶で体部下半に2個の竹管文が施されてい

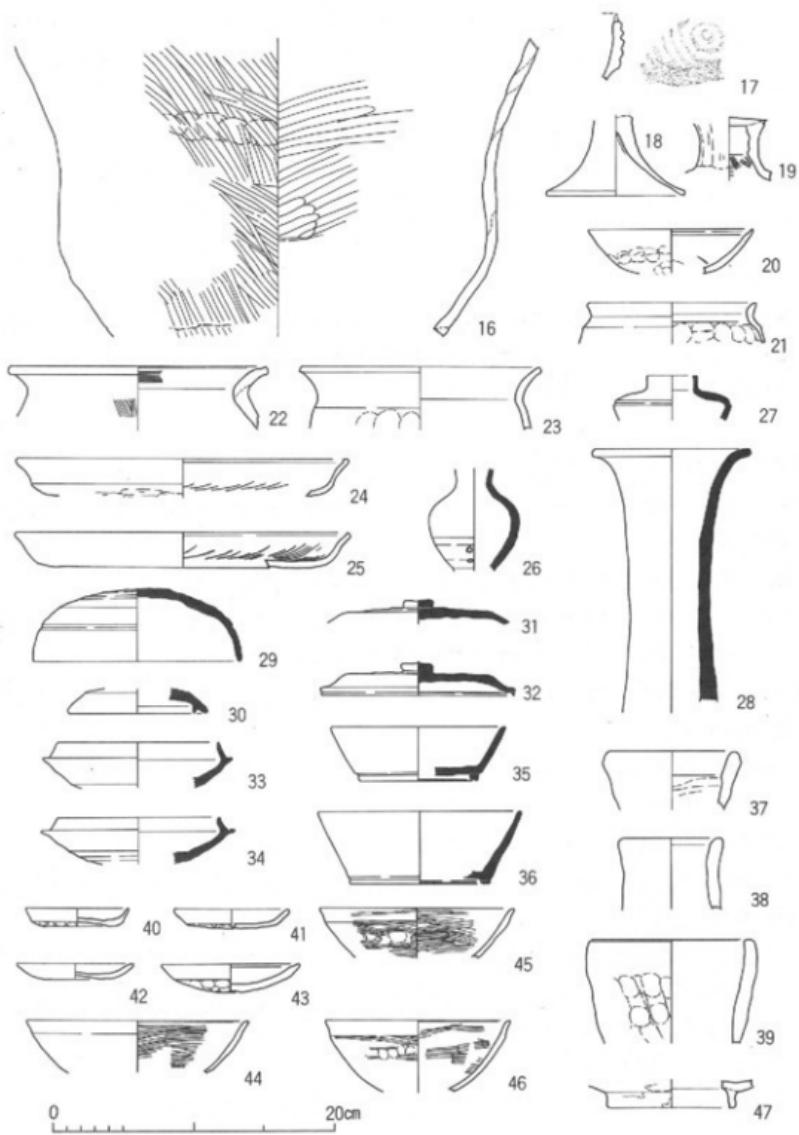


插圖5 河道2出土土器

る。

黒色土器は、A類が出土している。楕と断面四角形を呈しふんばる高台がある。楕(44)は、口縁端部に内傾する面をもち、内面に丁寧なヘラミガキ調整が施されている。楕には、他に口縁部内面に沈線が巡るものがある。

瓦器には、楕がある。楕(45・46)は、口径13.7cmと13.0cmを測り、いずれも口縁端部は内傾する面をもつ。体部内外面ともにかなり丁寧に横方向のヘラミガキ調整が施されているが、(45)は、口縁部外面もヨコナデ調整の後一部横方向のヘラミガキ調整が施されている。

灰釉陶器は、輪高台と呼ばれる高台がある。(47)は、見込みの部分に重ね焼きの跡が認められる。

製塙土器は、103点ある。口縁部がひらき、端部が丸くおさまるもの(37)と直口の口縁部で端部が丸くおさまるもの(38)と直口の口縁部で端部が平坦面をなすもの(39)がある。全て奈良時代に属する紀淡海岐產のものである。^{註2}

河道3 (挿図6-48~61 図版6・7)

縄文時代から中世に至る遺物がある。縄文土器・土師器・須恵器・瓦器・瓦質土器・無軸燒締陶器がある。

縄文土器は、10点ある。晩期の粗製土器である深鉢あるいは甕の体部片(50)と底部(51)がある。(50)は、体部外面は、繊維束によってケズリ調整されている。底部(51)は、凹底である。破片には後期の北白川上層式に属する(48)や晩期に属する(49)がある。(48)は、縦方向の3条の条線と縦位の縄文(一段無節縄文・RL)が施されている。(49)は、爪型文が施されている。

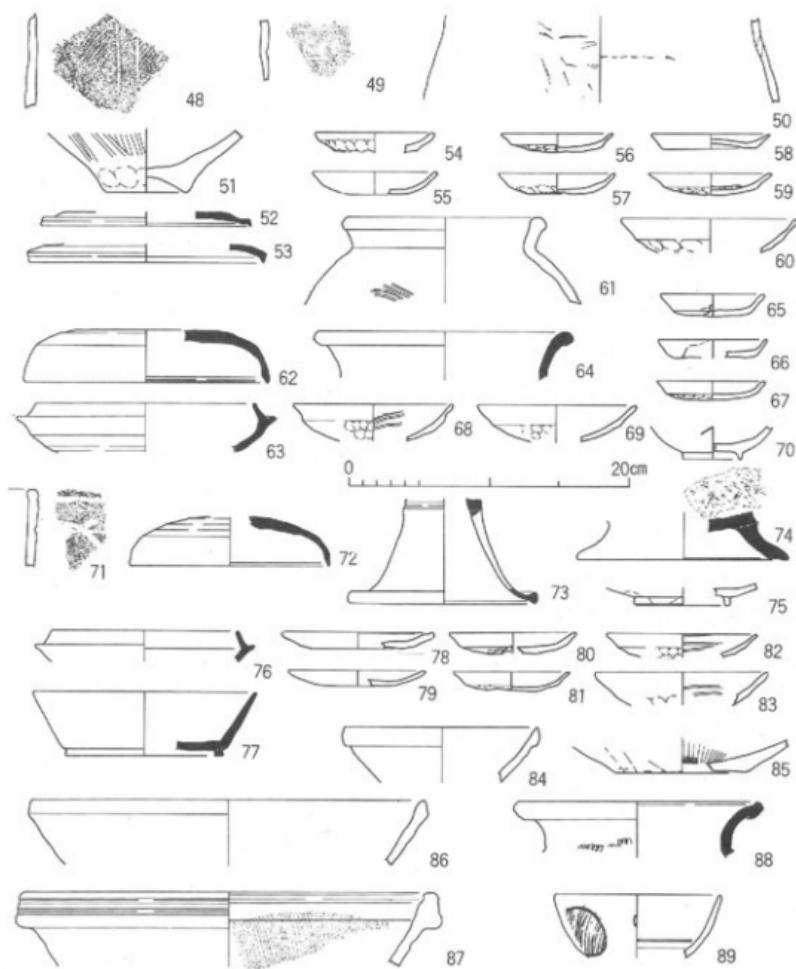
土師器は、中世に属する小皿・楕・羽釜・甕などがある。小皿には、口縁部と底部の境に稜をもつもの(54~56)と底部から丸みをもって口縁部に至る(57・58)がある。

須恵器は、古墳時代から中世に至るものがある。古墳時代から奈良時代に属するものには、蓋杯・甕がある。(52・53)は、奈良時代の杯蓋である。中世に属するものには、の東播系の摺鉢がある。

瓦器には、小皿と楕がある。小皿(59)は、口縁部と底部の境に稜をもつ土師器の小皿と同じタイプのものである。見込みの部分に螺旋状のヘラミガキが施されている。楕(60)は、口径12.3cm、残存器高2.5cmを測り、外面にヘラミガキが見られない。

瓦質土器には、摺鉢・火鉢・甕などがある。

無軸燒締陶器は、壺(61)が1点ある。口径13.2cmをはかり、口縁部はややひらき、端部は玉綱状を呈する。丸みをもつ肩部外面に単位4条以上の櫛描波条文が施されている。



挿図6 河道3・4 溝2 包含層出土土器

河道4 (挿図6-62~70)

古墳時代から近世の遺物がある。土師器・須恵器・黒色土器・瓦器・瓦質土器・青磁・無釉焼締陶器・磁器などがある。

土師器には、奈良時代に属する高杯や中世に属する小皿がある。小皿(65~67)は、口縁部と底部の境に稜をもつタイプである。(65・66)は、粘土結合痕が残る。

須恵器は、古墳時代から奈良時代のものがある。古墳時代に属するものには、蓋杯や甕がある。杯蓋は、天井部と口縁部の境に明瞭に稜が残るタイプと稜がなくなり口径が大型化するタイプ(62)がある。(62)は口径17cmを測る。杯身には、(62)に伴うタイプのもの(63)と奈良時代に属する高台を有するものがある。

黒色土器には、A類とB類の碗がある。A類の碗には、口縁端部が丸くおさまるものと沈線が巡るものがある。B類の碗は、1点のみ出土している。

瓦器には、碗がある。碗(68・69)は、口径10.9cmと11.2cmと小型で浅い。体部外面にはヘラミガキ調整が見られない。(68)の内面には間隔の広いヘラミガキ調整が見られる。

瓦質土器には、羽釜がある。

青磁には、碗がある。

無釉燒結陶器には、摺鉢片がある。

磁器には、18世紀代の伊万里焼がある。碗がある。碗には見込みの部分が蛇の目釉剥ぎがされた(70)や、吳須で梅文が描かれたものなどがある。

溝1

土師器の細片が4点出土している。

溝2(挿図6-71・72 図版6)

縄文時代から古墳時代の遺物がある。

縄文土器は、晚期のものと思われる口縁部片(71)が1点ある。

古墳時代に属するものには、土師器・須恵器がある。

土師器は、細片である。

須恵器は、蓋杯の蓋がある。杯蓋には、口縁部と天井部の境に稜があるタイプと無いタイプ(72)がある。(72)は、口径13.8cmを測り、口縁端部には内傾する面をもつ。

暗渠1

奈良時代から中世に至る遺物がある。土師器・須恵器・黒色土器・瓦器がある。

土師器は、奈良時代に属するもので皿・高杯・土釜・甕などがある。土釜は、生駒西麓産の胎土をもつものである。

須恵器は、蓋杯・甕などがある。杯身は、高台の付くものである。

黒色土器は、A類の碗が1点ある。口縁端部には、沈線が巡る。

瓦器は、細片であるが1点ある。

暗渠2

奈良時代から近世に至る遺物がある。土師器・須恵器・製塙土器・磁器がある。

土師器には、奈良時代から中世に至る皿・碗・高杯・土釜などがある。

須恵器には、奈良時代の蓋杯や甕がある。

製塙土器は、奈良時代に属する紀淡海軒産のものである。

磁器は、18世紀代の伊万里焼きの碗がある。外面に呉須で梅文が描かれている。

包含層（挿図6-73～89 図版7）

第7～9層

土師器・須恵器・黒色土器・瓦器・瓦質土器・土師質土器・灰釉陶器・製塙土器・瓦がある。

土師器には、奈良時代から中世に至る小皿・皿・杯・碗・鍋・甕などがある。

須恵器には、古墳時代から中世に至るものがある。古墳時代から奈良時代の蓋杯・壺・甕や中世の東播系の摺鉢などがある。

黒色土器には、A類の碗がある。

瓦器には、碗・小皿がある。

瓦質土器は、羽釜や平行タタキ調整のある破片が出土している。

土師質土器には、摺鉢や平行タタキ調整のある破片が出土している。

灰釉陶器は、輪高台と呼ばれる高台(75)がある。

製塙土器は、奈良時代に属する紀淡海軒産のものである。

第5・6層

土師器・須恵器・黒色土器・瓦器・土師質土器・瓦質土器・陶器・磁器・青磁・製塙土器・瓦などがある。

土師器は、奈良時代から中世に至るものがある。小皿・皿・高杯・土釜・甕がある。中世に属する小皿(78)は、口縁端部に沈線が巡るタイプである。

須恵器は、古墳時代から中世に至るものがある。古墳時代に属するものには、蓋杯や高杯の脚(73)や台付き壺の脚台部(74)がある。奈良時代に属するものには、蓋杯・壺・甕などがある。中世に属するものには、東播系の摺鉢がある。

黒色土器には、A類の碗がある。

瓦器には、小皿(81)や碗がある。

土師質土器には、羽釜・十能や平行タタキ調整のある破片が出土している。

瓦質土器には、甕などがある。

青磁は、碗がある。碗の外面には花卉の陰刻が認められる。

磁器には、伊万里焼の碗がある。碗には呉須で施文されている。

製塩土器は、奈良時代に属する紀淡海峽産のものである。

第3・4層

土師器・須恵器・黒色土器・瓦器・土師質土器・瓦質土器・無釉燒結陶器・陶器・磁器・青磁・白磁・製塩土器・瓦などがある。

土師器は、奈良時代から中世に至るものがある。小皿・皿・高杯・土釜・甌・甕がある。小皿には、(79・80)がある。(80)は、粘土の結合痕が認められる。

須恵器には、古墳時代から中世に至るものがある。古墳時代に属するものには、蓋杯(76)などがある。奈良時代に属するものには、蓋杯(77)や平瓶・鉢などがある。中世に属するものには、東播系の摺鉢(86)がある。

黒色土器には、A類の椀や高台がある。

瓦器には、小皿や碗がある。碗(82・83)は、口径10.4cmと11.9cmと小型で浅い。体部外面にはヘラミガキ調整が見られず、内面には間隔の広いヘラミガキ調整が見られる。

土師質土器には、羽釜・摺鉢や平行タタキ調整のある破片などが出土している。

瓦質土器には、摺鉢(85)・甕などがある。

無釉燒結陶器には、堺摺鉢がある。堺摺鉢(87)は、口縁部内端面下位に低い凸帯があり、口縁部外縁は、断面三角形を呈する。^{註3} 堀摺鉢の分類上Ⅲ期に比定される。

陶器には、丹波焼の摺鉢がある。

磁器は、18世紀代の伊万里焼がある。伊万里焼は、見込みの部分を蛇の目釉剥ぎするものがある。

白磁は、碗がある。碗(84)は、口縁部が玉線状を呈するものである。

第1・2層(挿図6-88・89)

土師器・須恵器・瓦器・瓦質土器・無釉燒結陶器・陶器・磁器・瓦などがある。

土師器には、奈良時代から中世に属するものがある。小皿・皿・土釜・甕などがある。小皿には、へそ皿と呼ばれるものがある。

須恵器には、古墳時代から奈良時代に属する蓋杯や甕(88)がある。

瓦器には、碗がある。

瓦質土器には、摺鉢・平行タタキ調整のある破片などがある。

無釉燒結陶器には、堺摺鉢がある。

陶器には、鉢がある。

磁器には、18世紀代の伊万里焼がある。皿・碗がある。碗には、外面に呉須で丸文を描くものの(89)やコンニャク判で桐をスタンプするものがある。また、見込みの部分を蛇の目釉刷ぎするものがある。

(田川)

- 註1 繩文土器については、大阪府教育委員会文化財保護課 技師 宮野淳一氏・天理大学文学部歴史文化学科 桑原久男氏より御教示頂いた。
- 註2 山内紀嗣 「布留遺跡出土の製塙土器I」 考古学調査研究中間報告9
埋蔵文化財天理教調査団 1984年
- 註3 堺市教育委員会 「堺環濠都市遺跡(SKT79)発掘調査報告」 堺市文化財調査報告書 第三十七集 1988年12月
「近世都市遺跡出土の陶磁」 東洋陶磁学会第17大会資料 1989年11月

2. 石器

石器遺物の総数は137点である。うち14点を除いて、他はすべてサヌカイト製の打製品である。これらのうち複刃削器(12)、剥片(No.34)、磨石(37)だけが、縄文時代晩期の河道から出土している。他はすべて古墳時代～近世までの河道、近世の暗渠、包含層からの出土であるため、ほとんどのサヌカイト製の打製品については遺構の所属時期に年代をあてることはできない。しかし、それらの年代は土器資料から縄文時代後期から晩期と推測することが可能である。サヌカイト製品以外のものは遺構の所属時期に年代をあてることのできるものもあるが、できないものもある。

さて、137点の石器遺物には、サヌカイト製の打製品として石器14点、石核14点、剥片93点、礫3点、綠色片岩製の磨製石斧1点、綠色片岩片1点、砂岩製の石皿3点、磨石2点、砂岩片3点、礫岩製の凹み石1点、凝灰岩質頁岩製の砥石1点、花崗岩製の臼1点が認められる。

ここでは、まず、サヌカイト製の打製遺物として、個々の石器、石核、剥片の中でも打面作成剥片、ビエス・エスキエだけをとりあげて記述した後、他の剥片は観察表にしてまとめる。観察表は山中一郎が「長原遺跡出土の石器について」^{註1}の中で示した方法に従う。なお、この観

察表には剥片素材の石器も含めて剥片としての属性観察が可能なもののすべての資料が含まれる。サヌカイト以外の製品については、その他の遺物として記述する。

なお、実測図は原則として打面側を手前にして、先行剝離面側を左側に、主剝離面側を右側に配置する。ただし、石鎌、石錐、彫器、横形削器(6)、ピエス・エスキエ(18)、石核についてはそれに従っていない。記述にあたっては先行剝離面側を表面とし、主剝離面側を裏面とする。左右の記述は特に指示のある場合を除いて、すべて実測図の左側を基準にしておこなう。その場合も、打面側を手前においたと想定して記述している。

サヌカイト製石器遺物

石鎌1～2（挿図7・図版8）

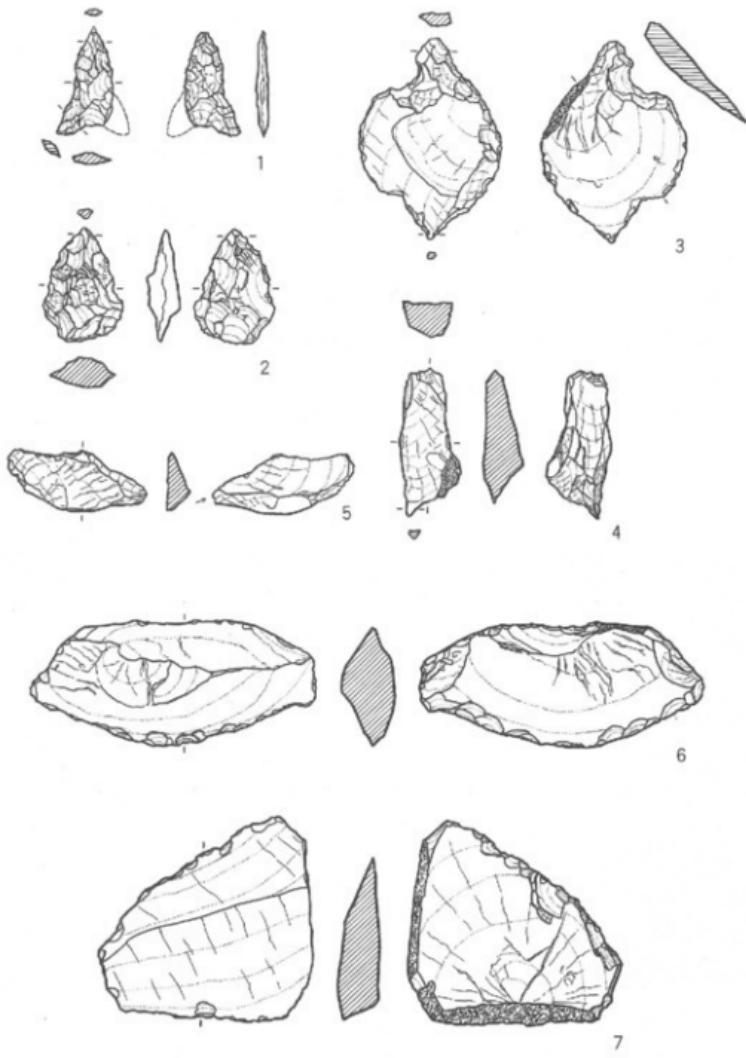
(1) 基部の形態は極凹形である。基部の作りだしは平形表面細部調整の後、平形裏面細部調整によっている。調整は両面調整で、中央断面は両凸形である。整形は非極厚細部調整で、裏面右縁、左縁、表面左縁、右縁の順に整形されているが。表面左縁部中央から基部寄りに認められる凹部は表面からの打撃による折れである。先端部と片脚部が折損している。残存長26.2mm、幅15.9mm、厚さ3.3mm。河道2出土。

(2) 素材は厚みのある横形剥片で基礎部を裏面右縁にしている。打面は表面細部調整によって取り除かれている。基部の形態は凸形である。基部の作りだしは薄形裏面細部調整の後、薄形表面細部調整によっている。調整は両面調整で、中央断面は両凸形である。整形は右縁が薄形楔形直線形裏面細部調整と厚形深形孤立凹形裏面細部調整、左縁は薄形深形凸形表面細部調整と厚形深形孤立凹形裏面細部調整が複合する。最大長30.5mm、幅21.8mm、厚さ9.0mm。河道3出土。

石錐3～4（挿図7・図版8）

(3) 原面打面をもち打瘤のやや発達した横形剥片を素材にして、その素材の先端縁左端に尖端刃部を作りだしている。尖端部の整形は、左縁が折りとった後、その折れ面に薄形深形直線形裏面細部調整を、右縁は表面からのたたき折りでノッチを作りだした後、尖端部を鋭くするために極厚形深形凹形表面細部調整によって形作られている。素材の基礎部右端にはつまみを作りだしている。つまみ部の整形は、左縁は原面上に薄形深形孤立凹形裏面細部調整を施し、右縁は薄形深形および楔形を重複させて、両面細部調整でノッチを作りだし、その右側に薄形深形直線形裏面細部調整でさらに形を整えている。尖端部の断面形は四角形。両錐形は四十直。連続度は4分の1以上。尖端部の尖り方は鈍く、やや磨滅している。長さ53.0mm、幅38.0mm、厚さ8.0mm。河道2出土。

(4) 垂直割れをおこした剥片を素材にして、その素材の先端部に刃部を作りだしている。尖



0 5 cm

挿図7 石鏃 石錐 彫器 橫形削器

端部を作りだすために素材の原形を変えるほどの整形はなされていないが、尖端部を鋭くするために薄形深形孤立凹形裏面細部調整を施している。尖端部の削面形状は三角形。尖端部の尖り方はやや鈍く、磨滅している。長さ40.0mm。幅17.0mm。厚さ11.2mm。河道2出土。

彫器5 (挿図7・図版8)

(5) 削離面打面をもつ打瘤の発達しない横形剝片を素材にして、その素材の先端線左半分に主削離面から1回の彫刀面打撃を加えた無調整面彫器である。彫刀面打撃以外の細部調整は認められない。長さ37.5mm。幅16.1mm。厚さ7.1mm。第7層出土。

横形削器6～7(挿図7・図版8)

(6) 横形剝片を素材にして、その素材の先端線左側3分の1に極厚形深形凸形裏面細部調整と残りの右側3分の2に厚形深形凸形裏面細部調整を複合して刃部を作りだしている。なお、基端部は薄形深形（部分的に侵形が重複する）凹形裏面細部調整で素材剝片の打面を取り除いている。全体に磨滅が著しい。長さ22.8mm。幅77.1mm。厚さ15.5mm。河道3出土。

(7) 原面打面の打瘤の発達しない横形剝片を素材にして、その素材の先端線に薄形深形凸形裏面細部調整に一部、表面にも非連続で同様の細部調整を施して刃部を作りだしている。右側面にも原面をもつ。長さ54.1mm。幅56.0mm。厚さ10.9mm。河道2出土。

直刃削器8～9(挿図8・図版9)

(8) 基端部を欠いた横形剝片を素材にして、その素材の右縁に厚形深形凸形裏面細部調整で刃部を作りだしている。素材の先端線は素材剝片削離時の段か残されている。刃部と反対側には原面をもつ。長さ30.5mm。幅69.8mm。厚さ10.2mm。第2層出土。

(9) 線上打面をもつ打瘤の発達しない両極技法でとられた剝片を素材にしている。その素材の左縁に薄形深形直線形両面細部調整で刃部を作り出している。先端線右側には薄形深形直線形表面細部調整が認められる。素材の右側面は原面であるが、その原面を打面にして薄形侵形直線形表面細部調整が認められる。長さ60.5mm。幅56.5mm。厚さ8.3mm。第6層出土。

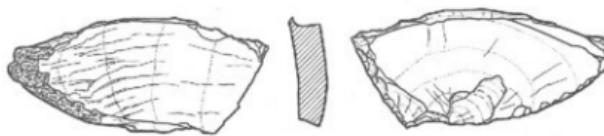
凸刃削器10～11(挿図8・図版9)

(10) 先端面か原面の横形剝片を素材にして、その素材の基端部を取り除くように、薄形侵形凸形両面細部調整に部分的に深形細部調整を重複させて、刃部を作りだしている。長さ73.1mm。幅57.2mm。厚さ10.4mm。河道3出土。

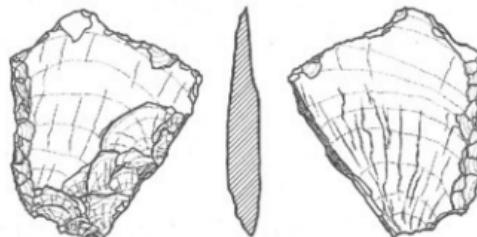
(11) 基端部を欠いた剝片の先端部破片を素材にして、先端線に薄形深形凸形裏面細部調整と平形深形凸形表面細部調整を複合させて刃部を作りだしている。長さ39.0mm。幅50.0mm。厚さ15.4mm。河道2出土。

複刃削器12～14(挿図9・図版9、10)

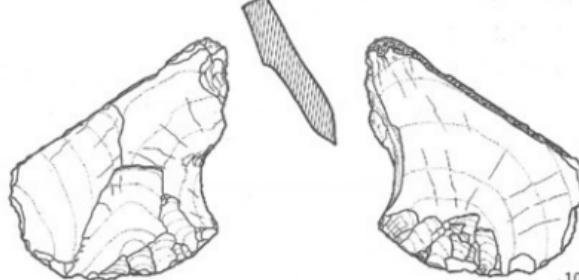
(12) 削離面打面で並列する二重バルブをもち、打瘤の発達しない先端ヒンジの横形剝片を素材



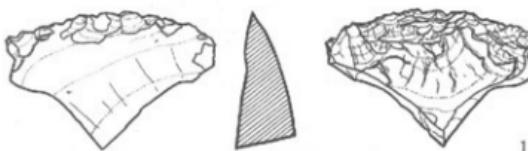
8



9



10



11



插图8 直刃削器 凸刃削器

として、その素材の先端縁と右縁に連続して刃部を作りだしている。先端縁の刃部は左側5分の4と右側5分の1の割合で角をもって交差している。先端縁の左側は厚形深形S字形表面細部調整、右側は薄形侵形直線形表面細部調整と厚形深形直線形裏面細部調整が複合している。右縁は厚形侵形凸形表面細部調整に極厚形深形凸形表面細部調整が重複している。全体に磨滅している。長さ45.1mm。幅60.1mm。厚さ8.0mm。河道1出土。

(13) 打瘤の発達しない剝片を素材にして、その素材の左縁先端側の半分と右縁基礎側の3分の1に刃部を作りだしている。左縁は平形深形直線形裏面細部調整と薄形深形(一部、侵形)表面細部調整が複合する。右縁は薄形深形直線形表面細部調整が施されている。基礎部は薄形侵形孤立直線形表面細部調整が右縁の刃付けの前に施され、そのとき素材剝離時の打面が取り除かれている。長さ58.5mm。幅30.5mm。厚さ8.5mm。第5層出土。

(14) 原面打面と思われる、両極技法で剝離されたため打面が線状になっている打瘤の発達しない横形剝片を素材にしている。その素材の右縁と左縁の全縁にわたって刃部を作りだしている。素材の先端縁は表面からの打撃をうけて欠けているため、刃部の全長はわからないがもっと長かったと思われる。右縁は基礎側の表面半分に薄形侵形孤立凹形細部調整と厚形深形凸形細部調整が重複し、裏面は全縁にわたって平形侵形凸形細部調整と薄形深形凸形細部調整が重複して施されている。左縁は基礎側の半分が厚形深形凸形表面細部調整、残りの先端側に薄形深形凸形表面細部調整が施されている。長さ31.8mm。幅46.5mm。厚さ10.9mm。第3層出土。

打面作成剝片15(挿図9・図版10)

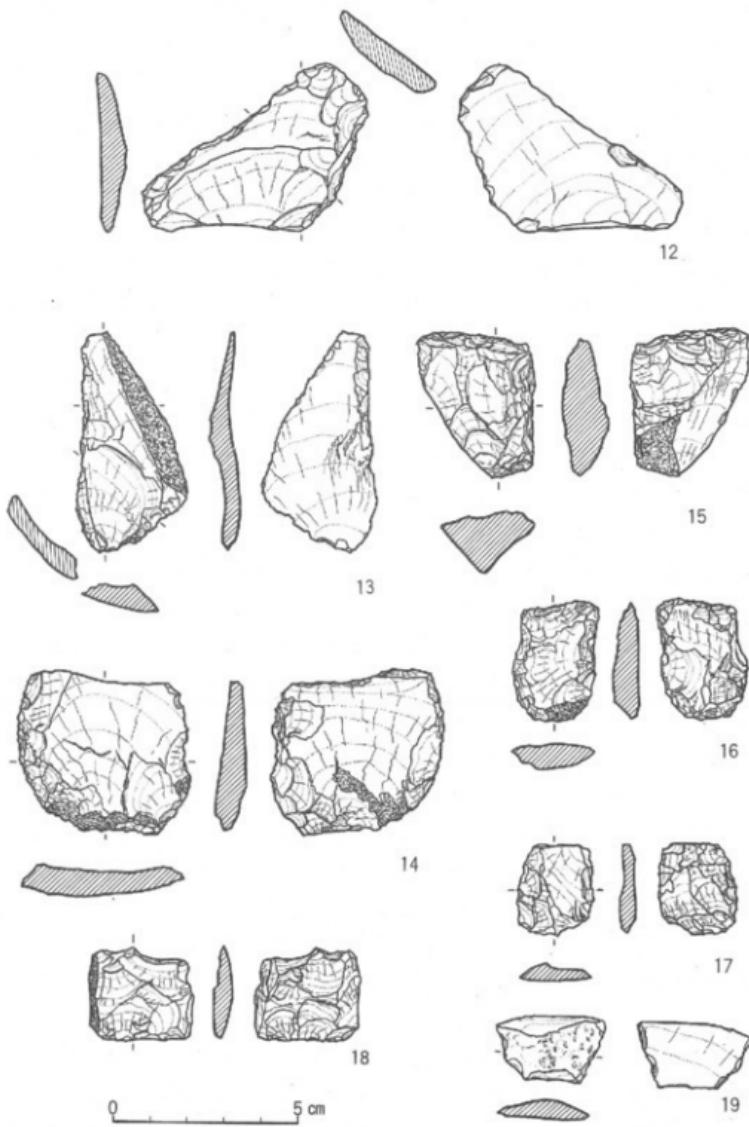
(15) 両極技法の石核の打面調整のために生じた剝片。石核時には両縁とも台石上打撃で剝片剝離がなされている。その為、石核の全縁に平形深形連続細部調整が認められる。ただし、それほど大きな剝片を剝離できていない。剝片は原面と平形深形細部調整が交差して山形をなす点を打点にしている。剝片の形態は石刃状剝片である。打瘤の発達はみられない。長さ39.5mm。幅31.2mm。厚さ25.5mm。第4層出土。

ピエス・エスキエ16~19(挿図9・図版10)

(16) 剥片の先端部と両縁部に平形連続前面細部調整が、基礎部に平形深形連続裏面細部調整が認められる。長さ31.5mm。幅30.5mm。厚さ7.0mm。第7層出土。

(17) 両極技法で剝離された原面打面の剝片の両縁部に平形深形連続細部調整が、打点部の右側には平形深形連続裏面細部調整が認められる。長さ26.8mm。幅22.5mm。厚さ4.4mm。河道2出土。

(18) 剥片の両縁部に平形深形連続前面細部調整が認められる。基礎縁にはピエス・エスキエとして、使用された時に生じた垂直割れが認められる。先端面は原面である。長さ28.6mm。幅25.8mm。厚さ6.9mm。河道2出土。



挿図9 複刃削器 打面作成剝片 ピエス・エスキエ

(19) 両端部を欠いた中央部破片を素材にしている。その素材剝片の両縁部に平形深形連続両面細部調整が認められる。表面は原面と折れ面で構成される。全体に磨滅している。長さ18.0mm、幅29.9mm、厚さ5.5mm。第3層出土。

石核20~31(摘図10~12・図版10、11)

(20) 右側面に垂直割れの認められる剝片を素材にした石核である。両極技法の石核で、素材剝片の先行剝離面に1枚の薄い剝片を取っている。剝片剝離作業は1回で、このときの打面はハジケで失われているが、長さ約27mm、幅約27mmの剝片を得ることができたようである。30.5×29.2×9.0(mm)。暗渠2出土。

(21) 剥片を素材にした石核である。両極技法の石核であるが、それほど大きな剝片を取ることができない。剝片剝離時に逆垂直割れをおこしている。32.5×22.5×8.0(mm)。第7層出土。

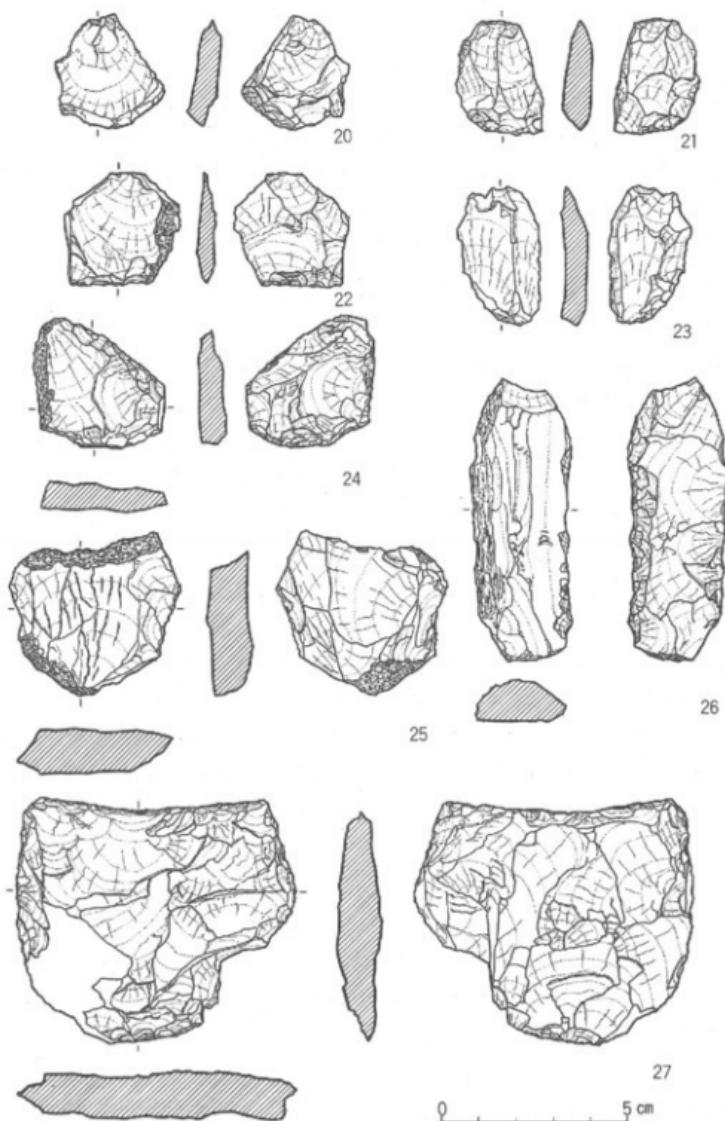
(22) 原面を小部分にもつ剝片を素材にした石核である。両極技法の石核で、1回の剝離作業で表裏両面から剝片が同時に取れた可能性が高い。このときの打面はハジケで失われているが、台石に接していたと思われる対縁には平形深形両面細部調整に似た小さな剝離が認められる。剝片剝離作業は成功したらしく、長さ約28mm、幅約23mmと長さ約26mm、幅約26mmのともに打瘤の発達していない剝片を取ることができている。34.5×29.6×5.7(mm)。第5層出土。

(23) 剥片を素材にした石核である。両極技法の石核で、1回の剝離作業で長さ約35mm、幅約16mmの打瘤の発達していない剝片を取ることができている。36.5×22.0×6.8(mm)。第5層出土。

(24) 原面打面をもつ剝片を素材にした石核である。両極技法の石核で、数回、剝片剝離作業を行っている。最初、素材剝片の主剝離面側を作業面にして、長縁部に打面を求めて2回、剝片剝離作業を行っている。次に90度転回して作業面を反対の面に求め、短縁部の原面を打面にして打撃を加えている。しかし、長さ約10mm、幅約16mmの先端が段になる剝片しか取れていない。39.0×34.0×8.7(mm)。河道2出土。

(25) 原面打面で先端面にも原面をもつ剝片を素材にした石核である。両極技法の石核で素材剝片の主剝離面で剝片剝離作業をおこなっている。位置はずれるが、素材剝片剝離時と同じ原面に打面を求め、剝離作業を1回おこなっている。この剝離作業で長さ約39mm、幅約32mmの剝片を取ることに成功している。なお、先行剝離面側の大きな剝離は素材剝片時のものか、石核として剝片剝離をおこなったとのものが判断つかないが、これは台石上打撃によるものではない。43.8×46.2×12.1(mm)暗渠2出土。

(26) おそらく短縁部の一端にある原面を打面にしたと思われる剝片を素材にした石核である。最初、素材剝片の打面と反対側の短縁を打面にして剝離作業を行っているがうまくいかず、90度転回して長縁部に打面を求めて数回、右へ打面を移動させながらはさみ打ちで剝片剝離作業



插図10 石核

をおこなっている。大きな剥片としては長さ約30mm、幅約25mmと長さ約28mm、幅22mmの2枚の剥片が取れている。素材剥片の先行剥離面は原面である。 $72.0 \times 27.0 \times 12.5$ (mm)。河道4出土。

(27) 剥片を素材にした石核である。両極技法の石核で、まず、短縁部を打面にしてはさみ打ちで剥片剥離作業を数回おこなっている。その後、90度転回して長縁部を打面にして同じようにはさみ打ちで数回剥離作業をおこなっている。そのうち、何回かの剥離作業はうまくいってらしく打瘤の発達しない剥片が数枚取れている。石核の周縁には平形薄形連続細部調整に似た小さな剥離が認められる。 $78.6 \times 75.0 \times 14.3$ (mm)。河道2出土。

(28) 剥離面打面をもつ先端ヒンジの剥片を素材にした石核である。素材剥片剥離時と同じ剥離面に位置を左にずらせて打面を求めて剥片剥離作業を1回おこなっている。このときの打撃で長さ約41mm、幅約29mmの打瘤の発達しない剥片を取ることができている。 $40.9 \times 37.0 \times 17.0$ (mm)。河道4出土。

(29) すべて剥離面で構成される石核片である。4打面石核で、そのうち3面はチョッピング・ツール状打面、あと1面は剥離面打面である。 $61.0 \times 40.5 \times 20.2$ (mm)。河道2出土。

(30) 片面の3分の2に原面をもち他は剥離面で構成される石核である。3打面石核ですべて原面打面である。 $56.0 \times 50.3 \times 28.2$ (mm)。第3層出土。

(31) 片面に原面をもち、他は剥離面と節理割れの割れ面で構成される石核である。3打面石核ですべて原面打面である。全体に磨滅している。 $55.1 \times 44.1 \times 10.4$ (mm)。第7層出土。

(32) 片面の全面に原面をもち、他は剥離面と節理割れの割れ面で構成される石核である。原面打面の単打面石核である。長さ約40mm、幅約28mmの打瘤の発達しない薄い剥片が剥離されている。磨滅が著しい。 $47.5 \times 34.0 \times 10.8$ 。河道2出土。

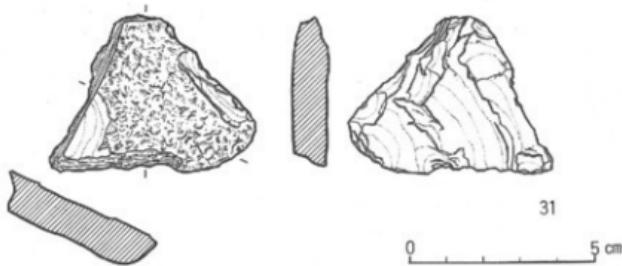
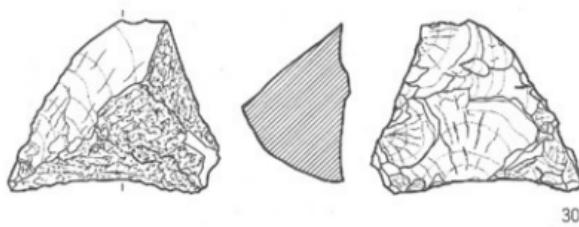
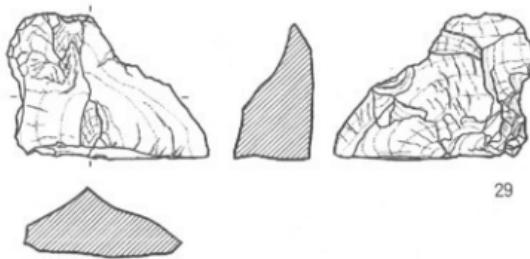
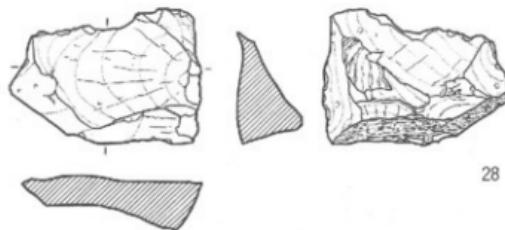
(33) 原面と剥離面で構成される石核である。2打面石核で、剥離面打面と原面打面である。原面を打面にした最後の剥片剥離はうまくいっていないが、剥離面を打面にした剥片剥離では長さ約36mm、幅約45mmの横形剥片を剥離することができている。 $46.5 \times 35.5 \times 13.3$ (mm)。第5層出土。

剥片

剥片は93点出土している。そのうち細部調整剥片は46点あり、ほぼ半数にあたる。素材の形態をみると横形剥片44点、剥片30点、石刃状剥片2点、同定不能17点である。この中には両極技法で取れた剥片8点が含まれる。それら93点の観察結果は付表1・2にまとめる。今回は出土点数が少ないので量的な検討はできない。

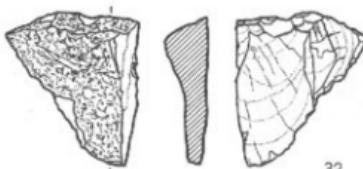
その他の遺物

砥石34(挿図12・図版12)

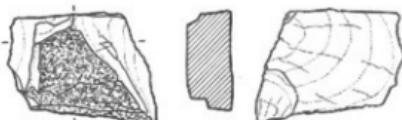


0 5 cm

插图11 石核

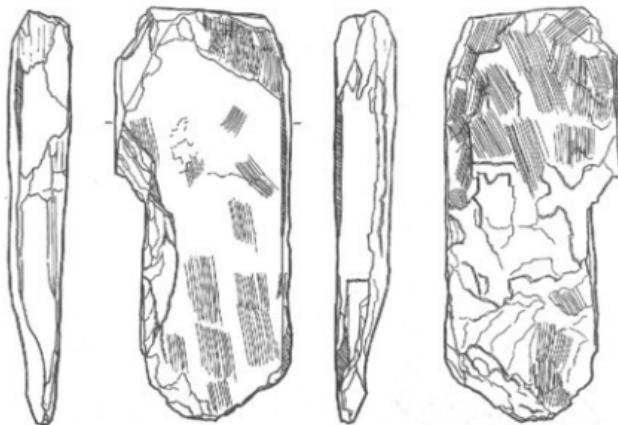


32



33

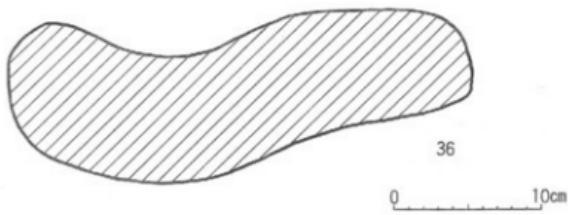
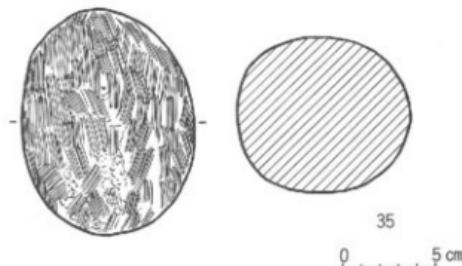
0 5 cm



34

0 5 cm

插图12 石核 破石



插図13 磨石 石皿

(34) 凝灰岩質頁岩製の砥石である。両側面の小部分に、この砥石の制作時の磨痕が斜線状に残っている。砥石としての使用痕は両面にわずかに残る。石質からみて金属製品を研ぐのに使用したと思われる。長さ137mm。幅68mm。厚さ24.2mm。試掘トレンチ出土。

磨石35、37(挿図13・図版12)

(35) 卵形の形態からみてハンマーと断定してもいいかもしれないが、敲打が集中する箇所が認められないので磨石と認定した。砂岩製である。全体に磨痕が認められるが、単にローリングによるものか、使用によるものが半勝がつかない。ほぼ全面にマンガンが附着している。河道出土のためとおもわれる。123×92×86(mm)。河道2出土。

(37) 和泉砂岩製の磨石である。偏平な丸石で、周縁に敲打痕が、片面のほぼ中央から周縁にむかって3分の1の範囲に磨痕が集中する。反対の面には中央にわずかに磨痕が認められるが顕著ではない。これらの磨痕から丸石をたてて、厚みのある方の面を手を持ってものを叩き潰したり、すりつぶしたと考えられる。134.5×134.8×72.7(mm)。河道1出土。

凹み石38(図版12) 磐岩製の凹み石である。偏平な丸石で、両面の中央に直径36mmと24mmの凹み部がある。周縁と小さい方の凹み部のすぐ横、45×45(mm)の範囲に磨痕が認められる。とりわけ、後者の磨痕は顕著である。104.1×99.5×69.1(mm)。河道2出土。

石皿36(挿図13・図版12)

(36) 和泉砂岩製の石皿である。偏平な石で、片面に直径約15mmの範囲で凹み部が認められる。磨痕はこの凹み部内に放射状に認められるのと、凹み部の横の平らな面にも認められる。400×300×110(mm)。河道1出土。

石臼

花崗岩製の上臼で、約半分残存している。深さ4.5cm、長さ4.2cm、幅3.2cmの方形の挽木穴が残っている。芯受けの直径は3.2cmで、深さは2.7cmを測る。分画数は8分画で、1単位に5本の櫛目が認められる。廻転方向は左まわしである。推定径29.0cm。厚さ8.3cm。河道3出土。

(栗田)

(註1) 山中一郎(1978)、「長原遺跡出土の石器について」、長原遺跡調査会編「大阪市平野区長原遺跡発掘調査報告書(大阪市交通局地下鉄延長工事、第31・32工区の発掘調査)」、大阪、pp. 34-79(再版1982)。

III まとめ

錦織南遺跡は、これまでの発掘調査で縄文時代から中世に至る複合遺跡として位置づけられてきた。包含層からは、弥生時代から中世に至る遺物が出土しているが、遺構で確認されているのは奈良時代と中世のものであった。その後、1981年の大阪府教育委員会の発掘調査で、縄文時代晚期の土器が多く含む河道が、遺跡の南部で確認され、遺跡が古く縄文時代まで遡ることが判明した。この調査では、東北地方の土器形式である大洞系の土器(大洞B・C)が出土し、遠隔地との交流をうかがわせるものとして注目され、大洞系の土器を伴う遺跡として、当時、東大阪市日下遺跡、藤井寺市国府遺跡について錦織南遺跡の名が付け加えられた。

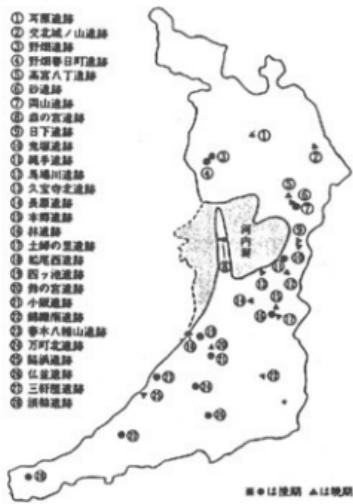
今回の調査地は、上記の縄文晚期の土器と共に大洞系の土器を伴う河道が検出された地点の東側に当たり、調査前から遺構の関連性に注目していた。その成果を以下に要約する。

1. 調査地点における縄文時代から現代に至る河道の変遷を知ることができた。縄文時代晚期の河道が調査地北側の低位段丘の縁辺まで川幅を持ちながら東に流れ、その後、次第に浅くなりながら南側に本流を変えていったと思われる。中世以降は川幅や流路の方向が一定になり、さらに南に流れを変え、時には急流となって、北側に氾濫したことわかる。中世には調査地周辺は水田化され、その後、細谷川が改修され、近世に小規模な氾濫を見るものの現在に至ったと考えられる。

2. 出土した縄文土器には

晩期(滋賀里I・III)の他に、上層の河道から後期前葉と中葉の北白川上層式土器が出土しており、調査地北側に広がる低位段丘上に集落の存在をうかがわせるもので、後期の遺跡のあり方を考える上で重要である。

3. 出土したサヌカイト製打製石器は土器と同時期の縄文後期～晩期の特徴を持つ。石核については、両極技法のものが多く見られる。



大阪府の縄文時代後・晩期の主要遺跡

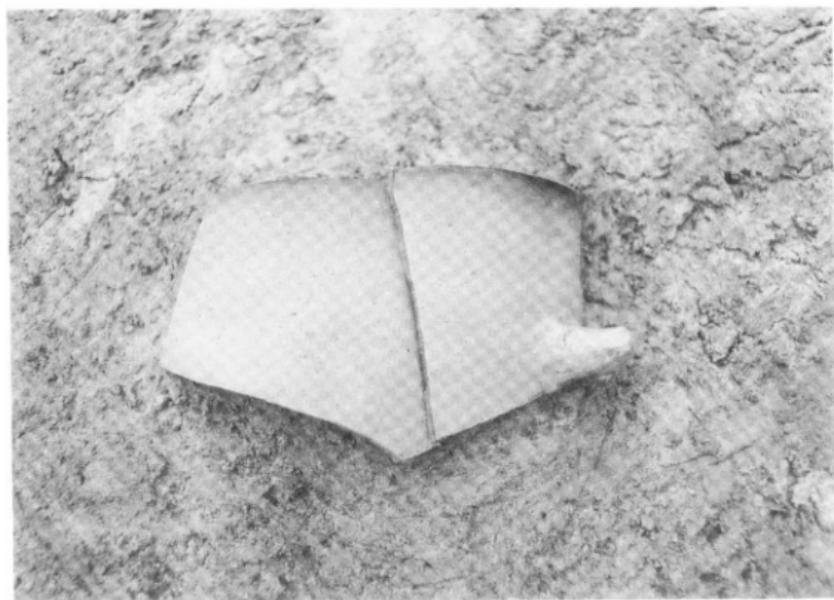
図 版



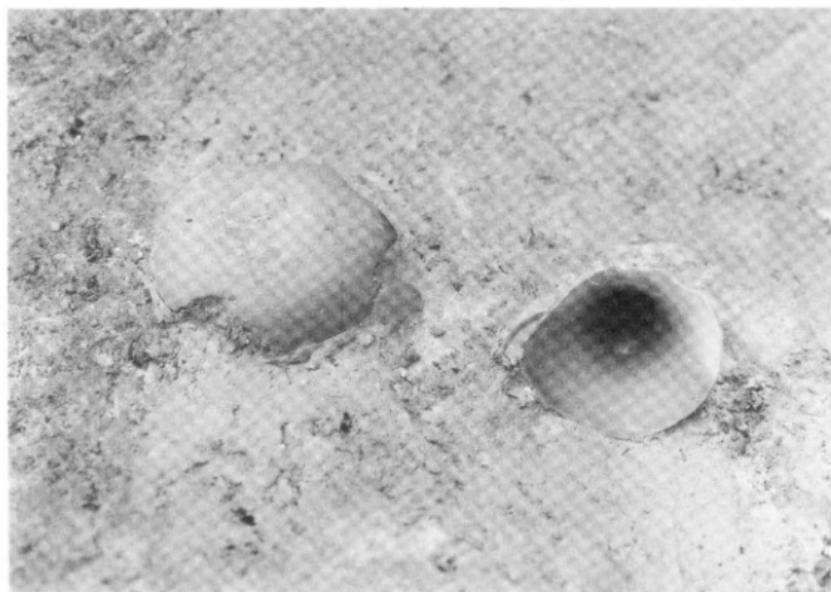
調査地周辺航空写真（南西から）



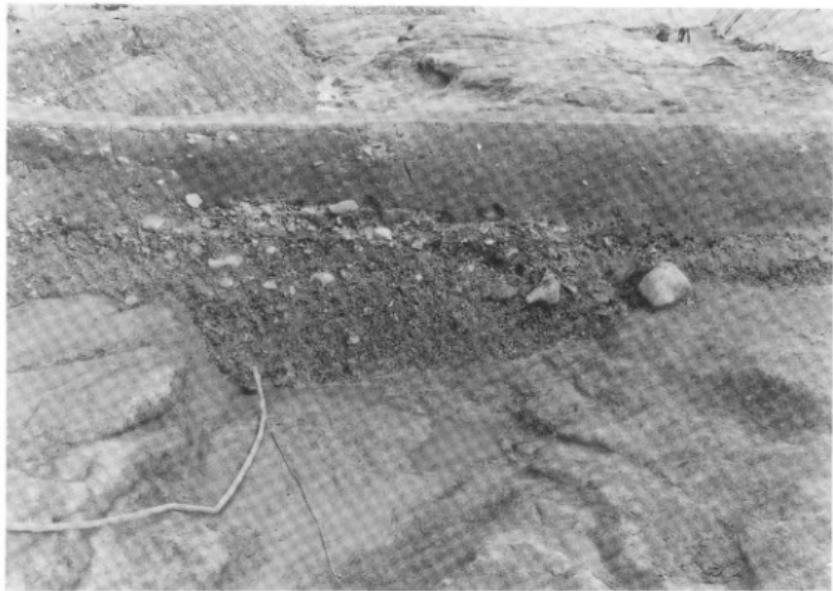
調査地航空写真（北西から）



河道2遺物出土状況（東から）



同上（西から）



河道2断面（北西から）



河道3断面（北西から）



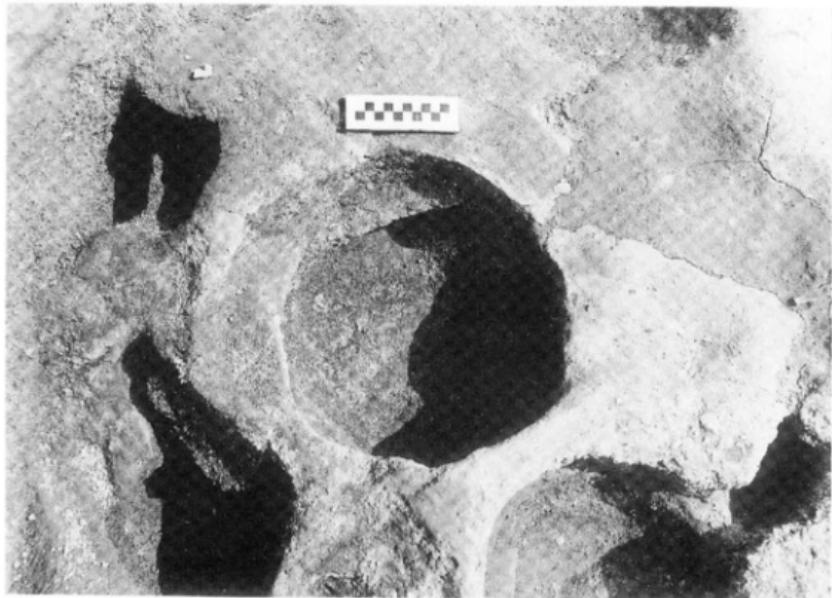
河道 1 全景（西から）



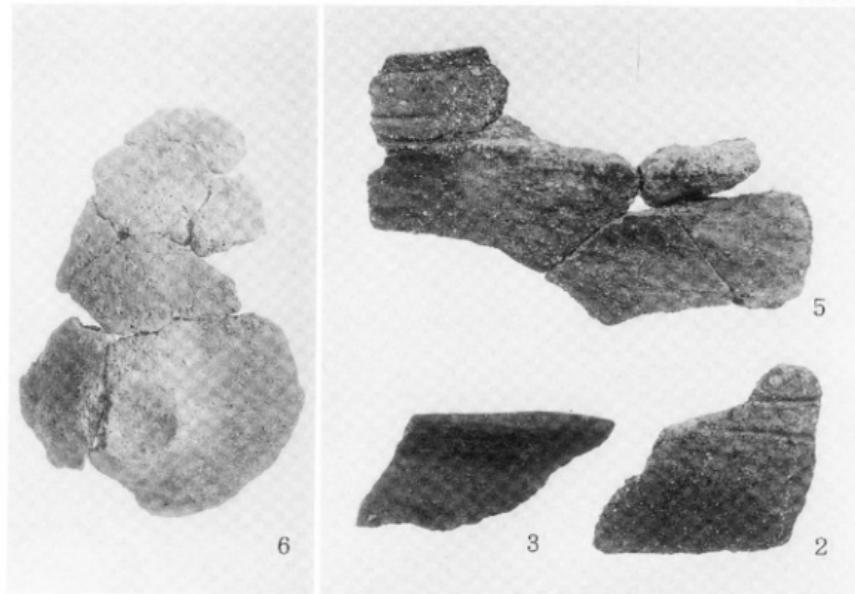
河道 1 断面（西から）



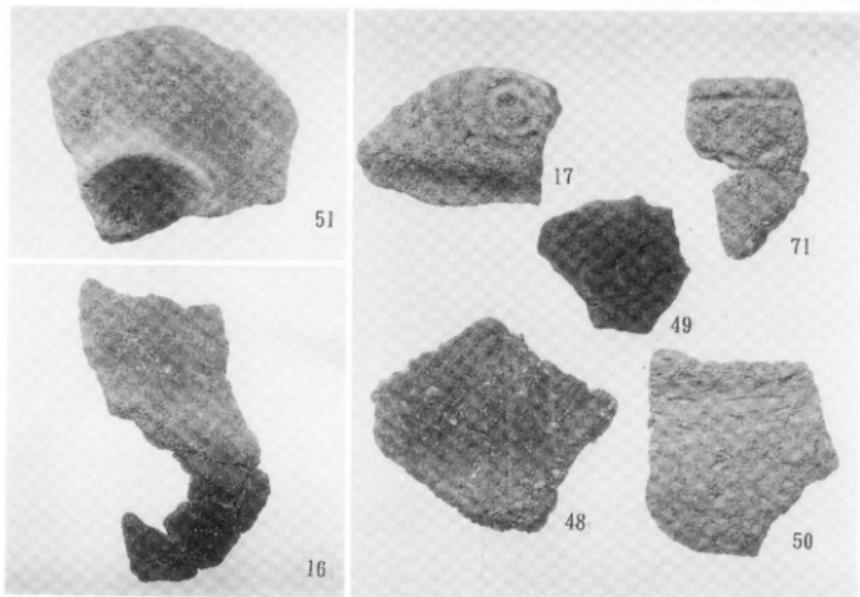
足跡化石群（西から）



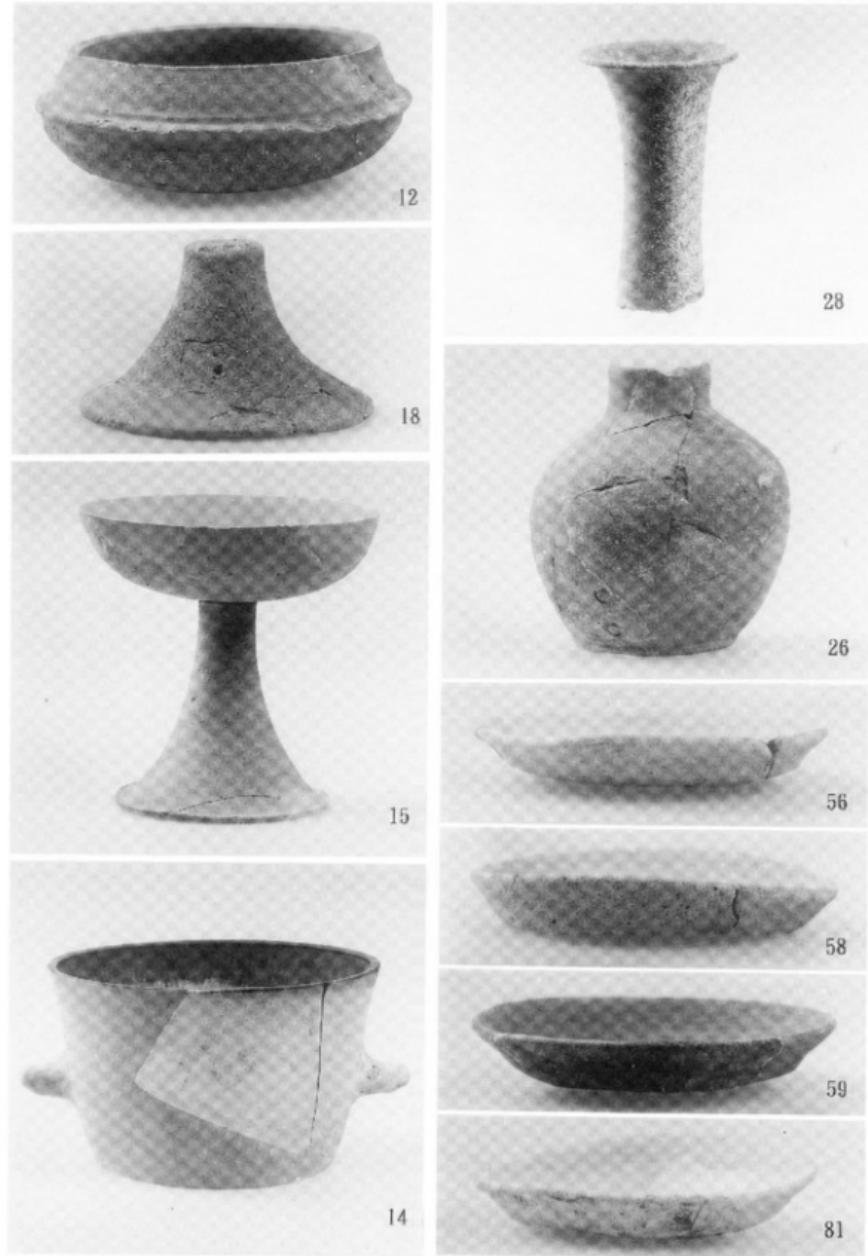
ゾウとシカの足跡化石（西から）



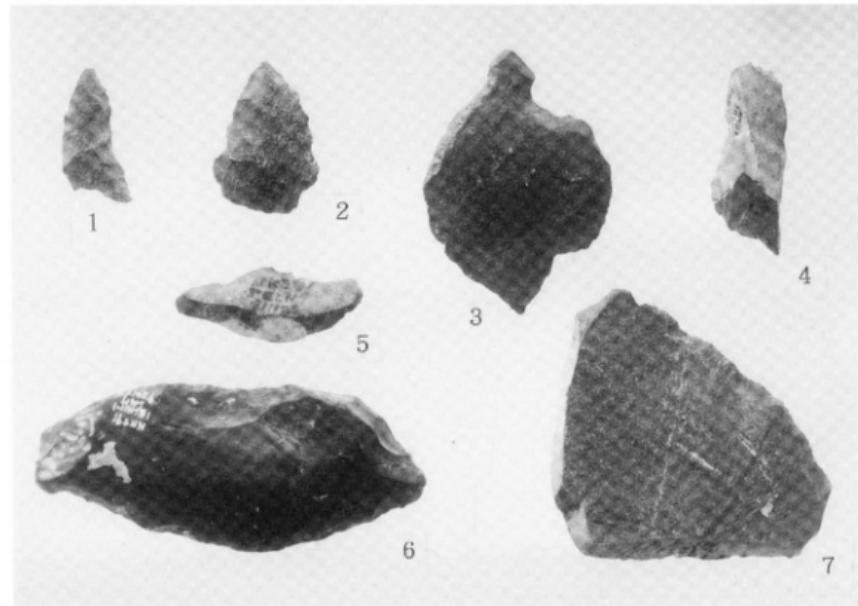
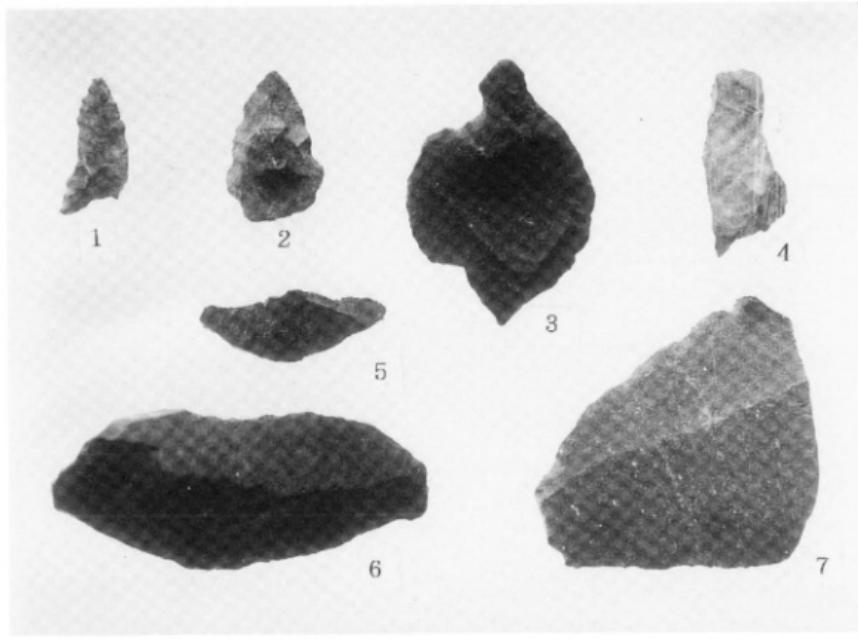
縄文土器（河道 1 出土）



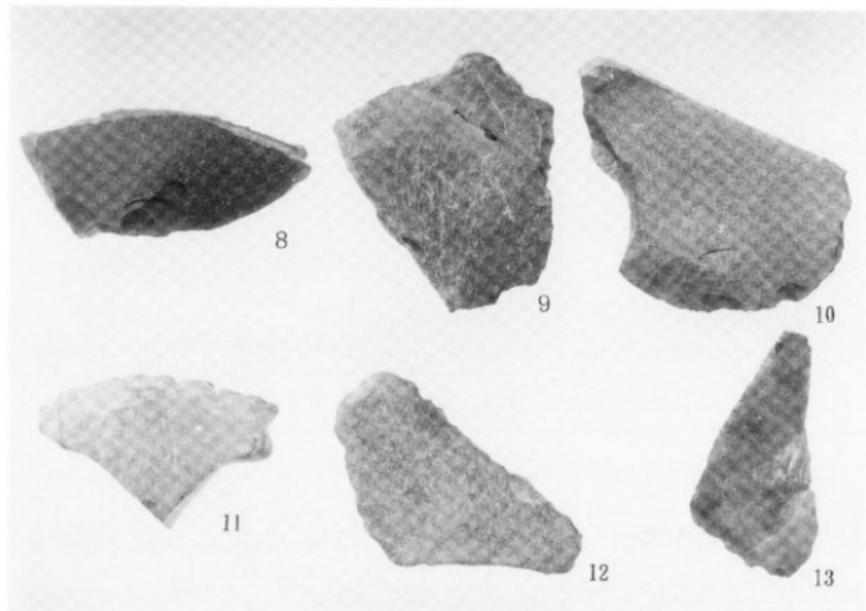
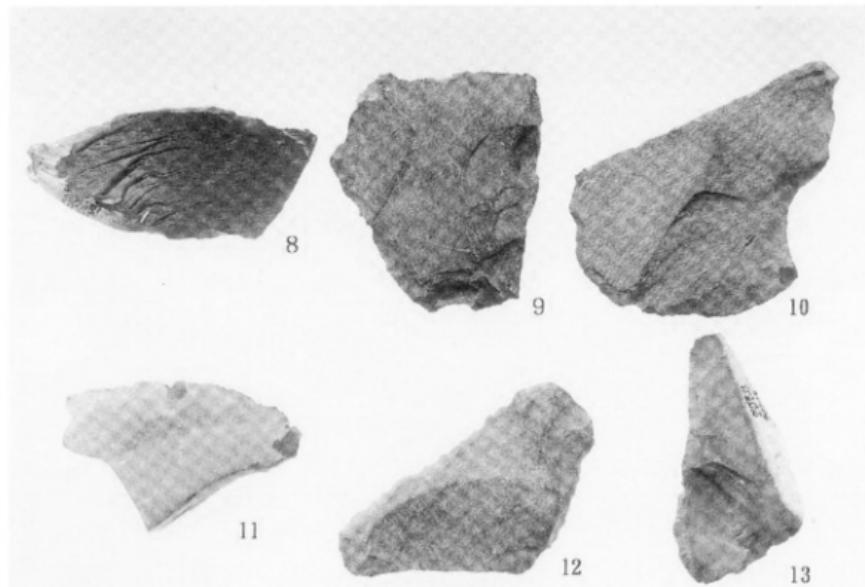
縄文土器（河道 2・3 溝 2 出土）



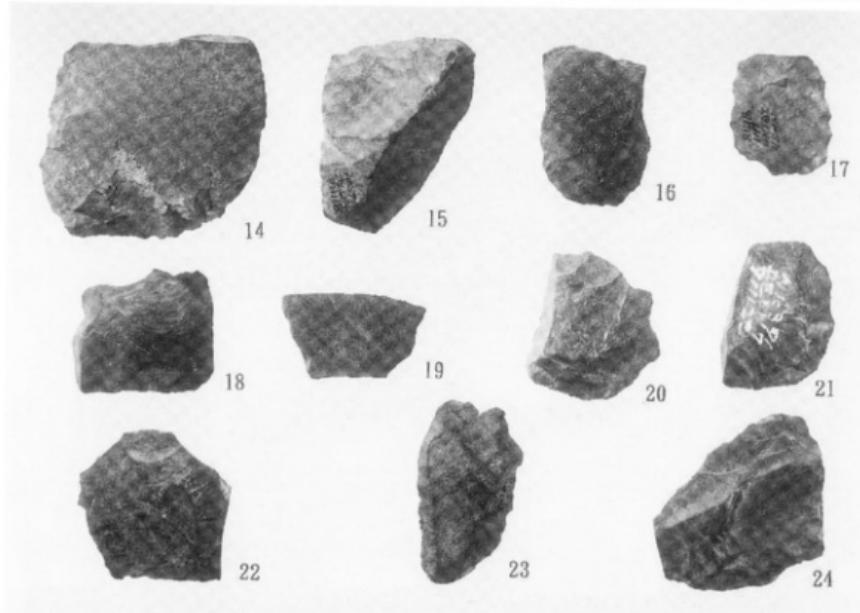
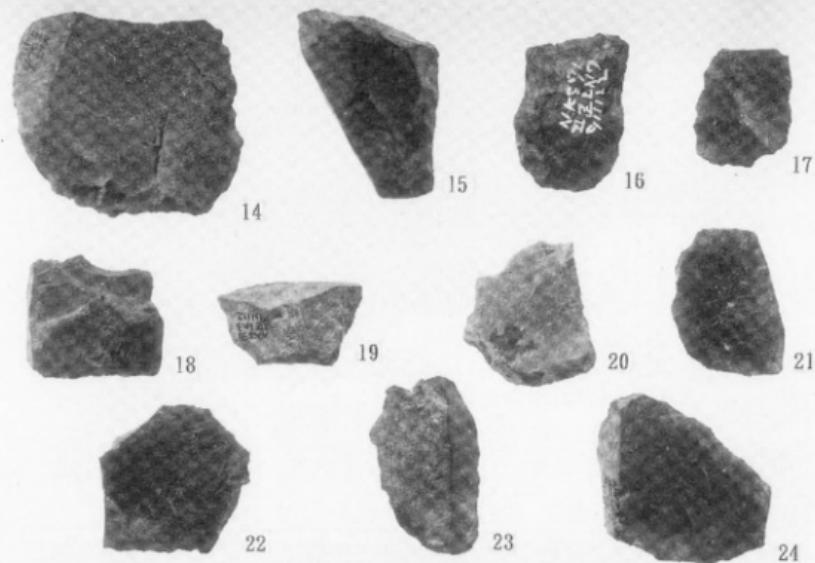
土師器 須恵器 瓦器（河道2・3 第5層出土）



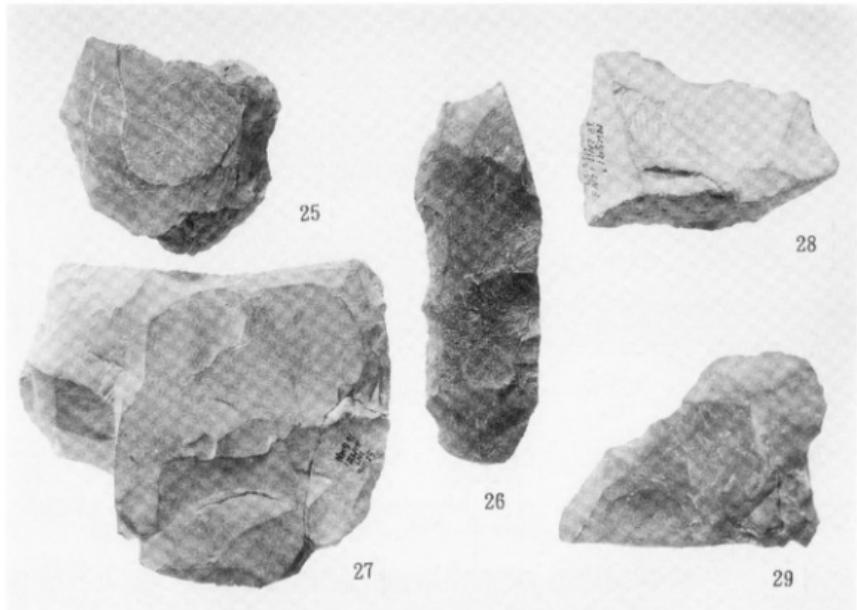
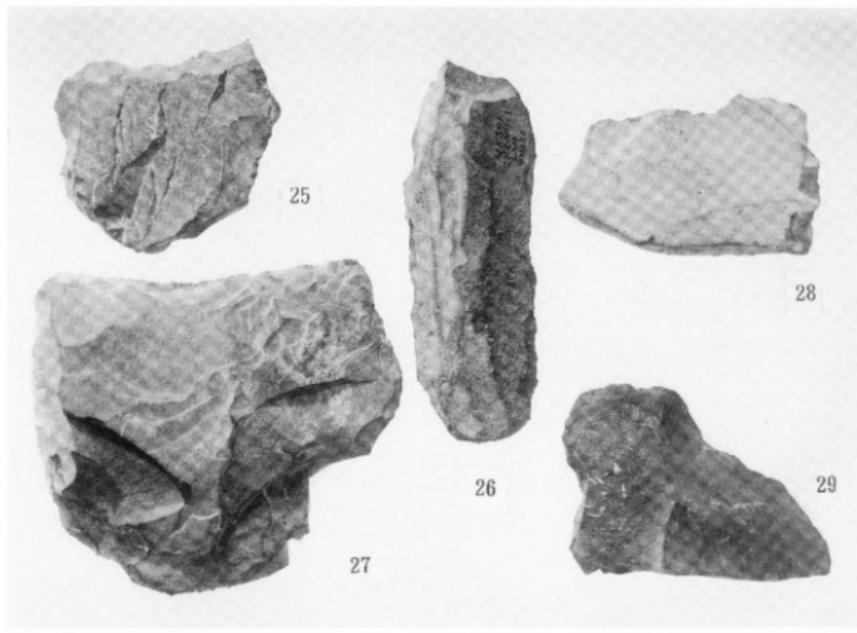
石鑽 石錐 彫器 橫形削器

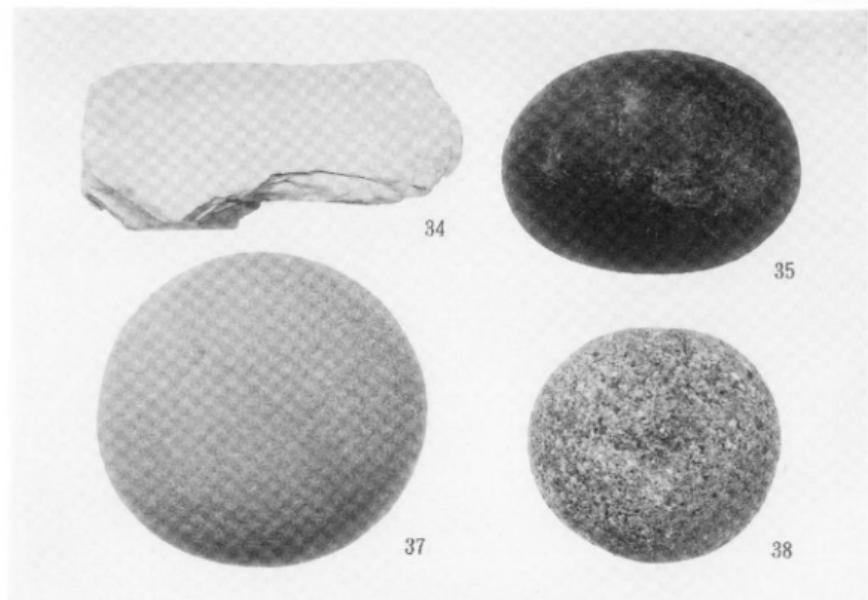


直刃削器 凸刃削器 複刃削器

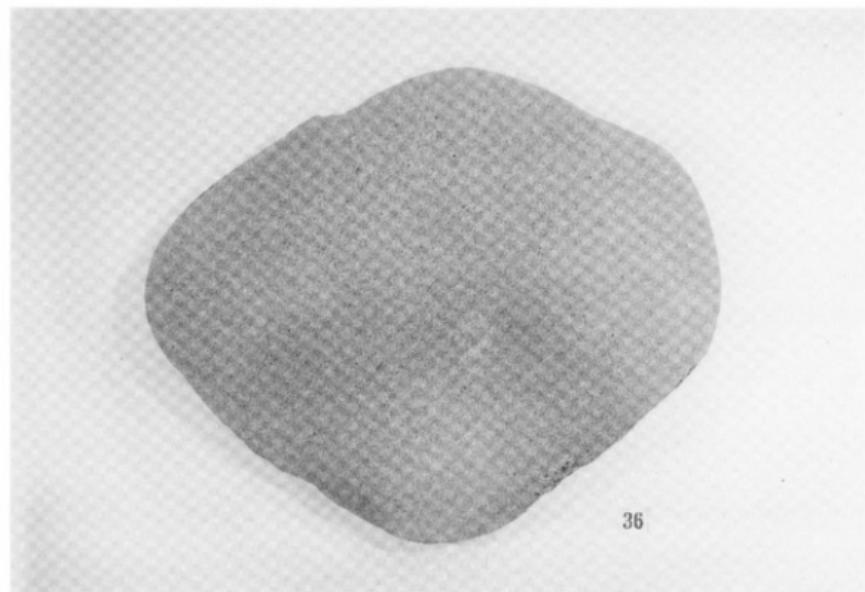


複刃削器 打面作成剥片 ピエス・エスキエ 石核





砥石 磨石 凹み石



石皿

